

試驗成績

水道用水供給事業編

I. 水質概況

I. 水質概況

1. 水源水質

○ 瀬田川

- ・瀬田川の水質を年平均値で見ると、有機物（全有機炭素（TOC）の量）は1.8mg/Lで昨年度と同程度、生物化学的酸素要求量（BOD）は1.4mg/Lで昨年度より増加した。また、アンモニア態窒素は0.02mg/Lであり、低濃度で推移している。
- ・琵琶湖でのかび臭発生は昭和44年以来続いている。瀬田川地点におけるジェオスミンの最高濃度は0.000004mg/L、2-メチルイソボルネオール（MIB）の最高濃度は0.000006mg/Lであった。

○ 淀川三川

- ・有機物（全有機炭素（TOC）の量）について、木津川、宇治川、桂川の年平均値は、各々1.7mg/L、1.7mg/L、1.6mg/Lであり、昨年度よりも僅かに減少した。また、BODについては各々0.8mg/L、1.3mg/L、1.3mg/Lであり、昨年度と比較して木津川は同値、宇治川は増加、桂川は減少した。
- ・アンモニア態窒素について、木津川、宇治川、桂川の年平均値は、各々0.02mg/L未満、0.04mg/L、0.10mg/Lであった。下水道の普及や下水処理の高度化等により近年改善されている。

○ 淀川本川

- ・有機物（全有機炭素（TOC）の量）について、淀川本川（枚方大橋左岸、右岸）の年平均値は、いずれも1.7mg/Lで、昨年度と同程度若しくは僅かに減少した。また、BODについては、各々1.2mg/L、1.1mg/Lで、いずれも昨年度から僅かに増加した。
- ・淀川本川（枚方大橋左岸、右岸）のアンモニア態窒素の年平均値は、いずれも0.06mg/Lであった。桂川の水質改善や淀川流入支川流域での下水道整備の進捗によって水質は改善され、近年は低水準で推移している。
- ・淀川本川（枚方大橋左岸、右岸）におけるジェオスミンの最高濃度は0.000003mg/L（左岸、右岸）、2-メチルイソボルネオール（MIB）の最高濃度は0.000030mg/L（右岸）であった。

2. 水源水質事故

- 平成 30 年度には、水源水質事故は 20 件発生した。これは、平成 29 年度と比較して 3 件増加した。
- 発生原因でみると、油事故は 13 件、油事故以外の事故は 7 件であった。
- 一時期、総油事故件数の 6 割を占めていた八幡排水機場経由の油流出事故は、自治体の努力や使用済自動車の再資源化等に関する法律（平成 14 年 7 月 12 日制定）等によって原因地域での施設改善が進み、減少した。平成 30 年度の発生件数は 1 件であった。

3. 浄水場

- 原水濁度の年平均値は村野、庭窪、三島浄水場で各々、9 度、8 度、9 度であった。有機物（全有機炭素（TOC）の量）の年平均値は村野、庭窪、三島で各々、1.9mg/L、1.9mg/L、1.8mg/L であり、昨年度と同程度若しくは僅かに増加した。
- 浄水の総トリハロメタンの年平均値は、村野浄水場では 0.006mg/L、庭窪浄水場では 0.006mg/L、三島浄水場では 0.005mg/L であった。
- クリプトスポリジウムとジアルジアについては各浄水場の原水で不検出であった。

4. 送水系

- 総トリハロメタンの年平均値は、市町村分岐等 14 地点の平均で 0.012mg/L であった。なお、最高値は野間中分岐で 0.028mg/L であった。